

「やぐらについて」

やぐらについて、聖書の内容をいくつか見てみましょう。
聖書では、やぐらをいろいろなことばで表現しています。

一見張り台、砦

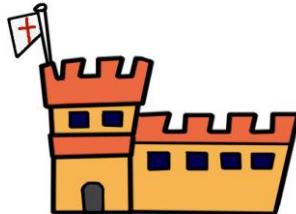
- Watchtower, guard post, observation post

ミツパ (ヘブライ語)

意味は、「見守るもの、やぐら」です（サムエルのミツパ運動を良く知っているでしょう）

聖書では、他のところにも「ミツパ」という単語がたくさんあります。

やぐらという単語は、新改訳聖書 - 49回 / 口語訳聖書 - 51回 使われています。



その中で、詩歌書と呼ばれる詩篇、箴言、雅歌に書いてあるみことばを見ましょう。

詩篇48:3

神は、その宮殿で、ご自身をやぐらとして示された。

詩篇61:3

まことに、あなたは私の避け所、敵に対して強いやぐらです。

詩篇62:2, 6

2 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。

6 神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。

詩篇144:2

主は私の恵み、私のとりで。私のやぐら、私を救う方。私の盾、私の身の避け所。私の民を私に服させる方。

ただ「神様が私たちのやぐら」だという告白をしています。

その神様が、神様に出会う唯一の道としてイエス・キリストをカルバリの丘の十字架の上に、救いのやぐらとして立ててくださいました。そのイエスを主と、キリストとして信じ、受け入れた者たち、すなわち、キリストと連合している者たちは、この世に福音の光を照らすやぐらとして、神様が立ててくださいました。

詩篇48:12

シオンを巡り、その回りを歩け。そのやぐらを数えよ。

私たちをこの世にやぐらとして建ててくださいました。私たちを、やぐらとして、また、聖霊が臨む神殿として建ててくださいました。そのようにやぐらとしてくださった私たちひとりひとりを見て、神様はこのように言われています。

雅歌4:4

あなたの首は、兵器庫のために建てられたダビデのやぐらのようだ。その上には千の盾が掛けられていて、みな勇士の丸い小盾だ。

ソロモンが書いたものですが、「ダビデのやぐら」「千の盾」と言っています。ダビデが建てた千個のやぐらに、千個の武器としての盾が、私たちが集まっているということです。なぜでしょうか。

私たちは、戦場を生きているからです。戦うために、この世に武器として遣わされるために、神様が立ててくださったのです。

しんげん
箴言18:10

しゆ な けんご ただ もの なか はし い あんぜん
主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走って行って安全である。

かみさま わたし
神様が私たちのやぐらであって、キリストを通して救われた私たちを、この世に建てたやぐらとしてくださった
のです。そのやぐらとして建てられた私たちは、神様に向かって走るべきだと、これらの聖書箇所から見ることができます。

せいしょかしょいがい
この聖書箇所以外にも、いろいろな意味の「やぐら」がありますから、みなさんが、默想してください。

こんげつ がくいんふくいんか
今月の学院福音化は、コリント人への手紙第一です。その概論は、YouTube に聖書プロジェクトが出しているもの
が詳しく説明しているので、それを見てください。

さんこう 参考YouTube チャンネル 聖書プロジェクト Bible Project-Japanese
コリント人への手紙第一
<https://youtu.be/1WdxOKKJKoE>



2課 よ 世について行かないこと、世を引っ張っていくべき (I コリント 6:20)

I コリント 6:20

だいか はら かと じぶん
あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

「ぴったり、ついていよう」

「やぐら」の役割は「守り、保護する」役割です。

まも ほ こ 守り、保護するのは、「攻撃して倒そうとする対象がある」ということです。

わたし てき 私たちの敵は、サタン（悪魔）です。サタンもやぐらを建てて、私たちを攻撃します。

そのサタンのやぐらはなんでしょうか。

それが、創世記3章（私）、6章（物質）、11章（成功）です。

つまり、善悪を判断する主体になって生きようとした人間が、

かみさま ぶっしつ 神様ではなく物質（マンモン）を神として、

じぶん な たか ゆうし えら ひと にんき もの い 自分たちの名を高めようと、勇士として偉い人、人気のある者として生きようとして、

ネフィリム文化の中に生きるようになったのです。

それらのサタンのやぐらによって崩壊した人間の結果は、

エデンから追放され、

洪水の戒めにあい、

ことばを乱されて、散らされるようになったのです。

同じように、サタンが建てたやぐらによって、紛争、分裂した教会がコリント教会でした。

その当時のコリント地域は、東洋と西洋をつなぐ、ギリシャのもっとも発展した港町でした。

それゆえ、物質的には繁栄をきわめた都市でした。しかし、物質の豊かさは、快楽と淫乱と墮落をともないます。

そのようなコリント教会の中にあった問題に対して答えを与えるために記録されたのが「コリント人への手紙第一、第二」であるパウロの手紙です。



これは、当時のコリント教会の中にだけあった問題ではなく、こんにちの教会が直面している問題もあります。

ただ、どんなに多くの問題があっても、それらの問題の答えは「ただ一つ、イエス・キリスト」です。

パウロは、コリント教会の中にあった問題に対して、イエス・キリストと十字架、つまり、福音をさらに詳しく説いて説明しています。

第2課の聖書箇所(6:20)に「自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」とあります。

これは、私のからだといのちをささげて、主のために、神の国のために献身しようということではありません。

腐って無くなるからだをささげても、神様は喜ばれません。



私たちのからだは、神様から受けたので、神様のものです。私のものではないので、神様にささげることもできません。

私たちのからだは、イエス様の血潮によって買われたので、神様のものです。

私たちの中におられる神の靈である聖霊様が、私たちを神殿とて、やぐらとして建ててくださり、いま、働いておられます。ですから、私たちのからだは、私たちのものではありません。

しかし、私たちは、毎朝、目を覚ますとき、肉の欲望と情欲に従って生きようとする私(自分)が生きます。

それゆえ、その私(自分)を十字架につけること、これが第一です。

イエス様も「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われました。

それゆえ、毎日、自分のからだだけではなく、考え、心、不安な未来まで、すべて神様に任せましょう。神様の統治の中に完全に入ること、それが、「自分のからだをもって、神の栄光を現わす」ことです。

十字架のことば=「私」の死

Iコリント 1:18

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

神の力は、十字架のことばは、十字架の道であり、それは、私が死ぬことです。

それを先に模範として私たちに見せてくださったのが、イエス・キリストです。

ピリピ 2:6-8

6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考へず、

7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現われ、

8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

十字架は、自分を無にすること=死ぬことです。そのイエス・キリストの死によって私たちは、いっしょに死に、キリストのよみがえりによって、新しくよみがえったのです。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」と書いてあります(ガラテヤ2:20)。

ガラテヤ 2:20

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

これが、私たちがこの世を生きる信仰です。

「ご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」ですから、なにかをがんばって、一生懸命にしようとするより、キリストとともに死に、よみがえって、私の中にはキリストだけが生きていることだけを告白して、それだけを信じましょう。

この世を引っ張っている万軍の王であるイエス・キリストに「ぴったり、ついている」なら、この世は私たちについて来るようになります。これが第2課の内容です。